大学生の生の声を聞いてみた

北海道教育大学函館校地域プロジェクトのメンバー。出身地がそれぞれ異なり、大学で初めて道南に来たメンバーも多いです。彼らには、北斗市はどのように映っているのでしょうか。

我々が日常生活の中で当たり前だと思っていたことも、彼らの声を聞くと、それが当たり前じゃないことに気付くかもしれません。

わかもの・よそものから見える北斗市、そして彼らの将来に対しての率直な想いを伺ってみました。

細川 颯汰（そうた）さん（2年）〈出身：せたな町〉

北斗市ってずーしーほっきーのイメージはあるものの、強く惹かれるポイントって見つけにくいですね。それよりは、祭りだとか、まちに残し続けたいものって必ずあるはずなので、それを探すことの方が大切だと思っています。

地元の人はよく「このまちには何もない」と言いますが、それは本当にもったいない。若者が興味を持つものは東京にあるようなものが多いかもしれませんが、僕らが大人になるにつれて「これがあるからいいまちだよね」と感じるモノが大切だと思います。それらが残れば、まちも残る。若い世代にその想いが伝われば、地元に留まる若者も増えるかもしれない。

まちの特徴を受け継ぎ、残す努力と、その意義を伝え続けることを見失わなければ、まちにとって良い結果をもたらすと思っています。

山本 歩実さん（2年）〈出身：北斗市〉

小学２年生から吹奏楽を続けています。吹奏楽って合奏の時は綺麗な音色ですが、練習中は結構うるさいんですよ。しかし近隣住民のみなさんからは、学校に対して苦情が一切なく（実際はあったかもしれませんが）、むしろ応援の声が多かったことをありがたいと感じています。吹奏楽を思いっきりできるこの環境は当たり前ではなく、地域の温かさがあってこそです。このような地域の人たちの温かさや理解力が、北斗市の魅力だと感じています。一方、課題としては情報発信力としてSNSなどを活用した広報がもっと必要だと思いますね。

将来は地元に残りたいです。これまでの感謝の恩返しとして、地域に貢献したいと考えています。

長崎 希生（きよお）さん（2年）〈出身：秋田県北秋田市〉

北斗市と秋田は、高齢者が増え、交通手段や免許証返納問題、そして若者の流出といった課題が似ていると思いました。高齢者向けの支援は多く試みられていますが、それを支える若者が不足しているのが現状です。まちづくりに興味を持つ若者が実は全国には沢山いるので、彼らを地域に呼び込むことで、若者も福祉に興味を持ち、地域全体の活性化にもつながるのではないかと考えています。

若者は地域活動に興味がないと思われがちですが、実際は違います。何もしないままでいると、何も変わらないと危機感を抱いています。地域活動に関わることで、将来の自分の成長や可能性につながっていけばいいなと思いますね。

できない理由より できる方策を考える

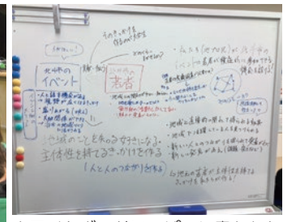
地域プロジェクト　北海道教育大学函館校

齋藤征人 教授

若者に触発される大人たち

若者が地域に関わる意義。それは、新しい視点やアイデアが地域社会に取り入れられることで地域の活性化が期待できることや、現場での課題解決に関わることを通じた若者自身の成長や地域への愛着形成にもつながるなど、相互にとって利益になると考えられることです。

日頃、地域社会の現場で学ぶ授業を実践していると、大人だけで話し合うよりも学生を交えた話し合いの方が前向きな議論になることが多いと感じます。また真剣に地域社会に向き合う学生の姿勢・態度によって、地域の大人たちの地域課題に向き合うモチベーションが高まるなど、学生たちに関わった大人たちの側の変化にも驚かされています。



ホワイトボードいっぱいに書かれた学生たちのアイデア。
１枚だけじゃ書き足りません。

課題をチャンスに 学生が主体的にうごく

昨年度から北斗市内で取り組んでいる本学の授業「地域プロジェクト」では、少子化や他の地域への転出が原因で人口減少が進む北斗市の現状をふまえ、地域住民をターゲットに北斗市の魅力を伝えながら公共交通機関や巡回ワゴンの活用を促すためのモニターツアーを企画・実施しました。

北斗市企画課と協働して行うこのプロジェクトは、あくまでも学生主体です。

交通機関や運営上の都合から限られた人数での実施でしたが、学生と一緒に見慣れた地域の中を「旅」した両ツアーは、改めて地域の魅力を再発見するとともに、地域暮らしのなかでの交通機関の活用方法や、その為の課題について考える機会となりました。

今後学生たちは、ツアー参加者からいただいた声をもとに、学生の視点から考える、交通機関やモニターツアーの改善案を提言していきます。

北斗市の魅力って何だろう？

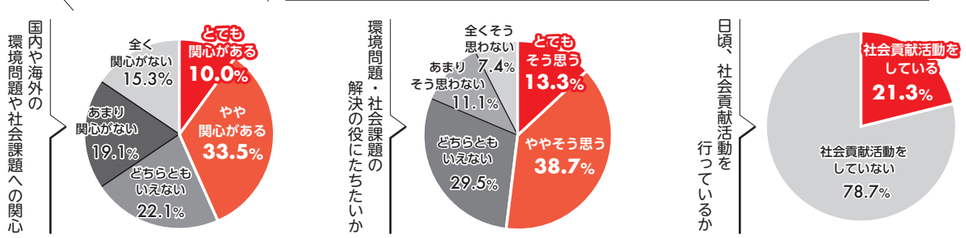
若者から託された 大人たちへのバトン

若者たちを通じて見えてくる北斗市の課題は、場合によって大人たちが見過ごしがちなものや目を背けたくなるものもありますが、できない理由より、できる方策を考えたいものと思います。

若者たちから託された大人たちへのバトン。

私たち大人は、それをどのように受け止め、色々な施策や暮らしに活かしていくのか、今度は私たち大人側が問われているのではないかと思います。

若者は無関心ではない！ グラフで見る若者の社会課題などへの関心と活動参加率



回答者：国内の中学生 300 人、高校生 300 人、大学生 400 人　出典：「2022 若者意識調査 －サステナビリティ、金融経済教育、キャリア等に関する意識－（日本総研）」